
秘密からの恋

琉兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秘密からの恋

【著者名】

琉兎

N3836BA

【あらすじ】

一眼ぼれなんてあるわけないと、思つてた俺が一眼ぼれした。でも、その相手と関わることがなく半年が過ぎた。そんなとき、俺は彼の秘密を知つてしまつ。それが彼との関係を大きく変える。

【夕日よ昇れ】の神原良介と檜山澪の話。なので【夕日よ昇れ】とリンクしたところがあります。

* 0 * (前書き)

これでようやくコンク作品が揃いましたあ！

やうに執筆速度遅くなるかもですけど……許してくださいこゝ

その人を好きになつたのは、高校生になつてすぐ。入学式で、壇上^{ひやまれい}の端に控えていたその姿を見たときだ。俺、檜山澪^{ひやまれい}は前から一番目だつたから、俺のところからよくその人の姿は見えた。世間的には一目惚れ^{ひとぼれ}というんだと思う。今までそんなこと信じてなかつたし、あり得ないと思ってたのに。なぜかその人から目が離せずにいた。なのに、一回もその人と視線が合つことなんかなくて。ただ、その入学式で名前は知つた。

生徒会副会長、榊原良介。
さかきはら りょうすけ

当時高校2年生。なのにもかかわらず副会長を務め、成績優秀な彼は、まさに生徒の手本のような人だつた。俺のところからはステージの裏も少し見える位置にいたから、そこでせいと会長になにやら注意をしていたのも見えた。そしてまた真面目な顔して式の進行を見守つていた。眼鏡の奥のその凛としたまなざしは、何を映してるんだろう。何が好きで、何が嫌いなんだろう。好きな人とか居るんだろうか。なんてことを式の間中考えていた。

でも、それ以降あの人には近づけることもなく、半年がたとうとしていた時だつた。僕は偶然、彼の秘密を知つてしまつた。しかもそれを知つたことをその場で彼にも知られ、他言するなど注意していつた。悲しいことに、それが彼との初めての会話だつた。その後も、彼は何かと僕に構つようになつたけど、それはおそらく秘密をばらされないように監視するため。恋愛感情なんか彼にはない。だつたら俺が好きにさせればいい。そう思つたその日から、俺は彼を良と呼ぶよになつた。

* 1 * (前書き)

第一話です。

基本、零視点です。

2年生の春がやつてきた。相変わらず、変化も何もない朝。いつも抱いて寝ているテディベアをわきに抱えて、洗面所に向かい顔を洗う。テディベアをソファに置くと冷凍食品のパンをレンジで温める。大体自炊なんかしない。というかできない。テレビをつけて、朝のニュースを見る。といつても聞き流すだけ。要は部屋が静まってなければいい。ほかほかに温まつたパンを加えながら、カップにミルクを注ぐ。

食事を済ませて、制服に着替える。Yシャツを着てその上にクリーム色のセーターを着る。ネクタイはあえてしていない。してなくともそれほど注意をされないのは校則の緩さのおかげだと思う。その上にブレザーをはおつて、洗面所に再び向かう。簡単に櫛で地毛の茶髪の髪の毛を梳かす。といつても、俺の髪の毛は癖つ毛だからどうしてもぼさぼさしてしまう。まあ、それも仕方がないことだからそれ以上の抵抗はしない。再びリビングに行き、テディベアの横に置いてあるイヤホンを首にかけ、プレイヤーをブレザーのポケットに入れる。さらに通学用のかばんを持てば準備完了だ。

「行つてきます……」

ぽふぽふとテディベアに別れを告げ、俺は寮の部屋を出た。ちなみに、俺は一人で寮の部屋を使っている。これも実は良のせい。同室生に秘密をばらされるのを防ぐためらしい。何とも用意周到だし、そこまで俺の事を信用してないのかと悲しくもある。イヤホンを耳に当て、俺は学校の校舎へと向かった。

教室に入つても、誰ひとり俺に声をかけてくる人はいない。俺が誰も寄せ付けない、そんな雰囲気を出しているからだと、前誰かに言われた気がする。とくにクールを気取つていてるわけじゃないけど、

どうやらやう思われているらしい。だから別に俺の方からも声をかけようとはしない。窓側の一番前の席が俺の席。鞄を机の横にかけてイヤホンをしたまま机に伏せる。どうせ今日も、何事もなく過ぎてくんだろうな。今日は何回会えるかな。今日は何回話せるかな。今日は何回あの人の目に映ることができるかな。そんなことを考えてしまうのは、もう日常茶飯事だった。

「お、澪ちゃん。どこへんだ？」

昼休み、昼食も食べた後教室を出たところで青葉淳にあった。同じ一年で生徒会書記をしている。数少ない俺が話す人。俺に話しかけてくる人。イヤホンをしていてもその声はよく聞こえた。イヤホンを外しつつ、そのほうに振り向く。

「保健室、サボるうと思つて。どうせ良にあえないし。教室いても暇

「副会長なら会いに行けばいるんじゃね？」

「いい。じゃあね」

「暇なら今から体育館でバスケやんだけど来ないか？」

「……バスケ？」

「そ、暇なんだろ？」

「……仕方ないから行く」

「素直じゃねーの」

別に、スポーツは嫌いじゃないだけ。体動かしてるといろいろ考えなくて楽だし、もともと運動神経は悪くない。ただそれだけ。ただ無関心で、あまり熱中できなかから部活には入つてない。そういえば、良は何かスポーツ得意なんだろうか。あまりそういう話はないからよくわからない。誕生日すら……知らないかも知れない。今度聞いてみようか。けど、教えてくれるかな。まだまだ知らない

ことが多い。だから知りたい。秘密なんかより、良自身のこといつぱい知りたいのに、良は教えてくれない。あまり自分の事を話したりするのが好きじゃないみたいだし。知りたい。好きだから、知りたい。少しでも近付きたい。

「澪　？どうかしたのかよ」

「あ……なんでもない、やべり」

「ダメだ。良の事考えると、周りが見えなくなる。」

* 1 * (後書き)

澪はビックで書いた氣もしますが素直じゃない寂しがりやなイメージです。シンテレかも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3836ba/>

秘密からの恋

2012年1月10日20時58分発行